

治罪法全訓集 第三卷

同法省記錄文庫
保
五百七十號

第 第 第
大 一 五
架 架 號

司法省
第一九號
寄贈圖書文庫

司法省記錄文庫
第一
一
號

XB 620
T 6
8 C

重罪裁判所
大審院
高等法院



XB 620
T 6
8 C

治罪法通則

第二編
二卷

司法省

福島裁判所米澤支廳検事

十四年十二月廿二日
十五年二月十六日付

第五章 重罪裁判所

第六條

治罪法分七十條本條草案

第七十條 重罪裁判所

に於てハ被告事件重罪ナルハ未遂

其管轄地内ニ於テ犯シ

犯又ハ法律上ノ宥恕ニ因リ輕罪ノ刑

タル重罪ヲ裁判ス

該ル可キ者ト雖モ重罪裁判所ニ於

テ第七十号本省達十五年一月三十日

テ之ヲ裁判スト有之候処修正ノ際

重罪裁判所仰章

其明文ヲ刪去セラルルヲ以テ考フレ

左ノ雛形ノ通相定候

ハ未遂犯又ハ法律上ノ宥恕ニ因リ

条該裁判所開設

輕罪ノ刑ニ該ル中ハ輕罪裁判所ニ

地方所在檢事裁

於テ之ヲ裁判スル儀ニ可有之候將

判所ニ於テ調製表ニ

夕明文ナシト雖モ固ヨリ重罪ナルヲ以

常ニ備置候様可

テ重罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判スル義

致此旨相達候事

可有之候

第四十六号公布十四年七月二十日

司法省

指令

第六條 各本條に記載スル特別減
輕之因り輕罪ノ刑ニ該ル者ハ輕罪裁
判所ニ於テ裁判ニ法律上ノ宥恕自
首其他ノ減輕之因り輕罪ノ刑ニ該ル
者ハ總テ重罪裁判所ニ於テ裁判ス
可シ

函館控訴裁判所判事

十五年二月十八日請訓
全年三月十日内訓

重罪裁判所長ノ義ニ付疑義差起リ

到底三説ニ分レタルニ付左ニ録シ

仰御内訓候

第一説 重罪裁判所長ハ乃々重

罪裁判所長ニシテ重罪裁判所長

治罪法第六十三條
第二項ニ陪席判事
四名ト有之

ト渾テ同視スヘキ者ニアラサルナリ抑
重罪裁判所長ト重罪裁判所長
トハ其性質同シカラスニシテ重罪
裁判所長ハ裁判所一般ノ事務
ヲ管理スル名稱ニシテ裁判所長
ハ唯々其裁判ヲ為ス一部ノ長タ
ルニ過キサルナリ故ニ治罪法第
三百七十六條ニ重罪裁判所ニ
移スノ言渡書ニ云々トアリ重
罪ヲ審判スルハ重罪裁判所
ニシテ裁判所長ノ私ニスルヲ得ヘキ
者ニアラス故ニ檢察官ニ於テ各
別ニ公訴状ヲ作りタリ上ニテ各

別ニ辯論ヲ為スルヲ求ムルモ裁判
所長ニ請求セサルヲ得ス又職権
ヲ以テ各別ニ辯論ヲ為サシムル若
クハ同時ニ辯論ヲ為サシムルモ裁
判所長ノ権内ニシテ僅カニ之ヲ
為スルヲ得ヘシ又治罪法分三
百七十八條ニ重罪裁判所長云々又
治罪法分三百七十九條ニ辯護人
差支アル時云々トアリ夫レ兩廷ニ
先タテ被告事件ニ付被告入リ
訊問シ又其辯護人ヲ選任シリ
ルヤ否リ向ヒ或ハ為メニ辯護人
ヲ選任シ若リハ改選スルモ皆被

告人ヲ保護スル本旨ニ出タル者
ナレハ乃チ裁判所長ノ職権ニシテ
裁判所長ノ職ニ屬スルキ者ニアラ
サルナリ又治罪法分二百六十二條
裁判所長ニ於テ重要ナル事由
ノ為メ檢察官其他訴訟關係人
ノ請求ニ依リ各記局ノ簿冊ニ
登記シリル訴訟事件ノ順序ヲ
變更スルルヲ重罪裁判所ニ適用
スル場合ニ於テ其手續ヲ為スハ裁
判所長ノ職権ニシテ裁判所長ノ
任ニアラサルヤ明カナリ何トナレハ
各記局ノ簿冊ニ登記シリル訴

訟事件ノ順序ヲ變更スルハ重
 罪ノ各事件ニ冥涉スル者ナシ
 ハ其裁判ヲ為ス一部ノ裁判長
 ニテ之ヲ為スヲ得ハキ理ヤケレ
 ハヤリ然ルニ治罪法第百七十条
 乃至百七十六条ハ重罪裁判所
 ノ構成及ニ権限ニ関スル條款
 ナルニ該條款ニ重罪裁判所
 長ノ成文アルヲ見ス又重罪裁
 判所長ヲ命スルニ付別段ノ法
 律モアラサル故ニ前段條款ニ
 散見スル重罪裁判所長又ハ裁
 判所長ハ或ハ重罪裁判所ヲ包

括スル控訴裁判所長ヲ指シタル
 者トセンカ其決ミテ然ラサルヲ
 知ルヘシ何トナレハ重罪裁判所ハ
 時ニ重罪事件ノ裁判ヲ為スヲ
 設クル所ノ裁判所ニテ其終
 審ノ裁判ヲ為スノ権ヲ有スルト
 至モ控訴裁判所ト性質ヲ同シ
 フスル者ニアラサレハ控訴裁判所
 長ト重罪裁判所長トハ自ら判別
 アリテ斯ノ如ク渾同視スル者ニア
 ラサレハヤリ之ヲ要スルニ重罪裁判
 所ハ別ニ特別ノ法廳ヲ設ケスニ
 テ控訴裁判所又ハ始審裁判所

所、於テ毎三ヶ月或ハ臨時罷廳
スル者ナレハ乃々無形ノ者ニシテ
裁判所ヲ用廳スルハ猶ホ裁判
ヲ罷クト云フカ如キ者ニ付用廳
時向裁判所長ノ職務ハ法律
上裁判長ニテ之ヲ行フ者トナシ
而シテ其用廳スルニ付諸般ノ
事務又ハ用廳ノ後既決事件
表ニ認印シ或ハ意見ヲ附記ス
ル一而已ヲ控訴裁判所長ノ職權
内ニ敏セシメナリ者ト相心得ユ
ルヲ穩當トナスニ似タリ

第二説 治罪法分三百七十六条

及ヒ分三百七十八条分三百七十九条
ニ散見スル重罪裁判所長又ハ裁
判所長或ハ治罪法分二百六十二
条裁判所長ニ於テ重要ナル事
由ノ為メ檢察官其他訴訟關係人
ノ請求ニ依リ登記局ノ簿冊ニ登
記セラルル訴訟事件ノ順序ヲ變更
スル一ヲ重罪裁判所ニ適用スル
場合ニ於テ其裁判所長ハ即チ
重罪裁判所ヲ包括スル控訴裁
判所長ノ謂ニシテ別ニ重罪裁
判所長等ヲ指称シタル者ニアラザ
ル一ト抑治罪法分七十一条ニ重罪

裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク云々又
其方七十三條、重罪裁判所ハ
云々又方七十六條ニ控訴裁判
所検事長ハ云々トアリ右ニ依リ
ハ重罪裁判所長ハ即チ控訴裁
判所長ナルトシテ微スルニ足レリ何
トナレハ其方七十一條方七十三條方
七十六條ハ重罪裁判所構成及ヒ
権限、関スル條件ナルニ付若シ
重罪裁判所長ハ控訴裁判所長
ニアラストセハ控訴裁判所長ニ於テ
重罪事件數多ナル場合検事長ト
共ニ司法御、具申シ其許可ヲ得テ

臨時由廳スルヲ得ヘキ権ヲ有スルノ
理ナリ又控訴裁判所長ニ於テ重
罪裁判所長及ヒ陪席判事ヲ命スル
ヲ得ヘキ権ヲ有スルノ理ナリ又控訴
裁判所長ニ於テ検事長ヨリ司法
御、差出ス既決事件表ニ認印
シ或ハ意見ヲ附記スルヲ得ヘキ
権ヲ有スルノ理ナリハナリ之ヲ要
スルニ重罪裁判所ハ一種ノ法廳ニ
シテ控訴裁判所ト其性質ヲ同ク
セサレハ重罪ヲ審判スルニ於テ終
審権ヲ有シ控訴裁判所ト匹敵
ノ地位スルヲ以テ其重罪裁判所

長ノ職務ハ法律上控訴裁判所長
カレケ之ヲ行ハモナシタルナラシ
リ故ニ重罪裁判所リ完廳スルニ當
リ重罪裁判所長即チ控訴裁判所
長ハ身身又ハ陪席判事ニ兼任
シテ周任ニ先ツテ被告事件ニ付
被告人ヲ訊問シ又辯護人ヲ選任
シタルヤ否ク同ヒ若シ其辯護人ヲ
選任セス或ハ改選スルキ場合之ヲ
選任セザルハ裁判所長ノ職權
ヲ以テ辯護人ヲ選任スル処置ヲ為
サレリ得ス又重罪裁判所長即チ
控訴裁判所長ハ重要ナル事由ノ

為シ檢察官其他訴訟關係人ノ請
求ニ依リ登記局ノ簿冊ニ登記シテ
ル訴訟事件ノ順序ニ變更スル処置
ヲ為スルヲ得又檢察官ノ請求ニ依リ
若シハ自己ノ職權ヲ以テ重罪裁判
所ニ移スノ言渡各ニ附帶ニ非サル教
箇ノ重罪ヲ記載シタルニ關セス各
別ノ公訴狀ニ依リ各別ニ辯論ヲ為
サレテ若クハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ
非サル教箇ノ重罪ヲ記載シタル
場合ニ於テ別ニ辯論ヲ為シ又教
箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付同
時ニ辯論ヲ為サシムル処置ヲ為ス

ラ得ルナリ尤重罪裁判所ヲ管轄内教
々所内廳スルルハ控訴裁判長ハ一
名ナルヲ以テ前記スル諸般ノ処置
實際為シ得ヘカラスレカ如クナレ
此場合其重罪裁判官中ニ委任
シテ職務ヲ行ハシムルハ敢テ差
支ナカレハ以上周陳スルカ如リ
ナルヲ以テ重罪裁判所長ハ即チ重
罪裁判所ヲ包括スル控訴裁判所
長ハ即チ重罪裁判所為スハ穩當ナ
ルニ似タリ若シ然ラズニテ重罪裁判
所長ハ乃チ一ノ重罪裁判所長ニシ
テ控訴裁判長ニマラストスル時ハ

治罪法ヲ三百七十六條及ヒガ三百七
十八條ヲ三百七十九條ニ散見スル輕
罪裁判所長又ハ裁判所長或ハ治罪
法ヲ三百六十二條裁判所長ニ於テ
重要ナル事由ノ為メ檢察官其他
訴訟關係人ノ請求ニ依リ登記局
ノ簿冊ニ登記シタル訴訟事件ノ
順序ヲ變更スル一ノ重罪裁判所ニ適
用スル場合ニ於テ其裁判所長ハ果シテ
誰ノ謂ナルヤ法律上其人イレル見ス又
之ヲ重罪裁判長ト為スルハ控訴裁
判所長ニ於テ同等ノ地位ニ立テ重
罪裁判所長ヲ命スルヲ得ルノ理ナ

キ而己ナラス裁判長ト裁判所長ト
渾同シ法律ノ明文ヲ破壊セサルヲ
得ヤルヤリ

第三説 重罪裁判所ニハ唯其裁
判長ト陪席判事トヲ命ジ裁判ヲ
為ヤシムル迄ニテ別ニ裁判所長
ナル者アルコトアラサルナリ故ニ治罪
法第七十三條ニ重罪裁判所ハ左
ノ職員ヲ以テ裁判ヲ為スヘシ一
裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ
其裁判所判事中ニテ之ヲ命スニ
陪席判事四名但控訴裁判所ニ
於テ開リ時ハ裁判所長ヨリ其裁

判所判事中ニテ之ヲ命シ始審裁
判所ニ於テ開リ時ハ其裁判所長
及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ又
其第七十六條ニ控訴裁判所檢
事長ハ開廳ノ後既決事件表ヲ
作リ司法卿ニ差出スヘシ事件表
ニハ控訴裁判所長認却ニ且意
見アル時ハ之ヲ附記スヘシトアリ
其別ニ重罪裁判所長ヲ用フルノ
明文無之ヲ觀レハ裁判所長ナ
ル者アラサルヤ明カナリ何トヤレハ裁
判長ノ外裁判所長ナル者アリト
セハ其明文ヲ示サセルヲ得ヤル義

此テ既決事件表ニモ其所長ニ於
 テ認仰し或ハ意見ヲ附記スルコト止
 マリ控訴裁判所長ヲシテ其職務
 ヲ行ハシムル道理ヤケレハナリ尤治
 罪法ヲ三百七十六條及ヒテ三百
 七十八條ヲ三百七十九條ニ章罪裁
 判所長又ハ裁判所長ト記載シテ
 ルモ右ハ裁判長ヲ指稱シリルコト外
 ナラヤレトシ其然ル所以ヲ推究ス
 ルニ檢察官ノ請求ニ依リ又ハ職
 權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ為サシメ
 若リハ同時ニ辯論ヲ為サシムルモ
 又被告事件ニ付被告人ヲ訊問シ

又辯護人ヲ選任シリルヤ否ヲ問ヒ或ハ
 為ラニ辯護人ヲ選任シ若クハ之ヲ改
 選スルモ裁判長ノ職權ニ屬スレハ
 ナリ其治罪法ヲ二百六十二條裁判
 所長ニ於テ章要ナル事由ノ為テ檢
 察官其他訴訟關係人ノ請求ニ依
 リ登記局ノ簿冊ニ登記シタル訴訟
 事件ノ順序ヲ變更スルコトヲ章罪
 裁判所ニ適用スル場合ニ於テ其
 手續ヲ為スハ乃ケテ裁判所長ノ職
 權内ナルモ章罪裁判所ニ別ニ裁判
 所長ヲ置カサルハ裁判長ニ於テ其
 職務ヲ行フモ敢テ不都合ナレド

ルハシ抑右方三百七十六條亦三百七
十八條亦三百七十九條ニ重罪裁判
所長又ハ裁判所長ト成文有之点
ヨリ之ヲ論スレハ重罪裁判所ニ亦裁
判所長ナル者アルカ如クナルニ亦一
前段^{ニ據}攝出セシ治罪法亦七十三
条及ヒ亦七十六條ハ重罪裁判所
構成及ヒ権限ニ関スル大原則ナルニ
該条歟ニ唯裁判所長ト陪席判事
トヲ命ジ裁判所ヲ為サシムル者ヲ示
スニ過キスミテ既決事件表ニモ控
訴裁判所長認仰シ或ハ意見ヲ附
記スルヲ觀レハ亦三百七十六條亦三

百七十八條亦三百七十九條ニ重罪裁
判所長又ハ裁判所長トアルニ即チ裁
判所長ナルニ疑ヒヲ容レサルナリ夫レ
唯然リ故ニ明治十五年一月九日附御
達詞令^{看式}ニ唯裁判所長ト陪席判
事トヲ命スルニ而已ヲ示サレタル迄
ニテ裁判所長ノ事ニ及ハサルハ以上
用陳スルカ如キ義ナルヲ以テナラニ
果シテ然ラハ其裁判所長タル者ハ
自ラ裁判所長ト稱スルヲ得ルニ止リ
裁判所長ト稱スルヲ得サルハ勿論
他ヨリモ裁判所長ヲ指シテ裁判所
長ト稱呼スルヲ得ヘキ理ハ方之ラ

サレナリ

前段ノ通ニ候条如何相心得可然
哉至急御内訓被下度此段希望
候以上

内訓

請刑ノ趣重罪裁判長ハ重罪裁
判所長ノ職務ヲ行フ義ト心得
ハシ

名古屋控訴裁判所判事

十五年三月九日付
全年全月廿五日付

治罪法カ二百七十九条ニ檢察官其他

訴訟関係人ハカ二百三十七条ニ定ナリ

ル原^由アルハ^中重罪裁判所ノ裁判官

及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ササスナリ

得ルトアリテ同カ二百八十一条ニ忌避又ハ

回避ノ申立及ヒ其判決ヲ為スニハカ二百

三十八条ヨリカ二百四十五条迄ニ定ナリ

ル規則ニ從フトアリ因テカ二百三十九条

ヲ闕ミスルニ其カ二百^三會議局ニ於テ

ハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯

明昏ニ依リ判決ヲサス可シトアリ而シ

テカ二百三十六条ニ故障ハ其裁判所

ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ

判決ス可シトアルニ因テ推考スレハ重

罪裁判所ニテハ故障ハ同裁判所ノ

會議局ニ於テ三名以上ノ判事ヲ以テ

判決スル義ニ可有之カト存候得共

右ハ豫審上訴ノ法律ニモテ公判通則
コハ別條セズ然リト雖モ若シ公判ニモ
該方ニ百三十六條ヲ適用スルモト
セハ重罪裁判所ハ裁判長陪席判事
ト共ニ三名ノ判事ニテ成立スルナルニ因
リ該判事中方ニ百三十七條ニ定リル
原由アルモノアリテ故障ノ申立有リ
差出シタルハ他ニ會議局ヲ組織
スヘキ判事ハアラサレ義ニ付此等ノ
場合ニ於テハ如何処置スルモノニ有
之候哉且會議局組織ノ順序午統
等治罪法中明記無之候條右午
統詳細御明示相成度保セテ相付

候間何分ノ御指揮有之度候也

指令

會議局ハ故障ノ申立アリタル場合ニ
於テ開設シ判事三名以上ヲ以テ定
員トス同面ノ如キ重罪裁判所ニ於テ
忌避回避ノ申立アリ為メニ定員ニ
不足シ生スルハ同廳ノ地ノ裁判所
ノ判事若クハ其差支アルハ判事
補ヲ以テ補欠トスヘキ義ト心得ヘシ

方ニ局

別紙如二局ノ付箋ニ依リ左ノ通各
控訴裁判所ハ御通牒相成可然
忒

各控訴裁判所長へ通牒 十四年三月十八日

今般各控訴裁判所長小畑判事ヨリ
重罪裁判所會議局組織、義、付
別紙、通牒出朱番、通御指令相成
候、何為御心得此段御通牒及ヒ
候也

宮城上等裁判所檢事 十四年十月廿九日付
十五年五月九日付

第十條 治罪法第七十條犯罪ノ性質
重罪ノ刑ニ該ル可キ者ト云モ宥恕
或ハ自首又ハ未遂犯等ナルヲ以テ其
刑ヲ減輕シ輕罪ノ刑ヲ課ス可キ者
豫審中其情状ヲ以テ認ムルハ云
凡其刑ハ減輕シテ輕罪ト為ルモ

重罪タルノ性質ハ依然存在スルモノ
ナレハ重罪裁判所ニ於テ管轄スル
モノカ將テ輕罪裁判所ノ管轄ニ歸
スル哉

指令

第十條 前段意見ノ通但法律上
特別ノ減輕ニ因リ輕罪ノ刑ヲ科ス
可キ者ハ重罪裁判所ニ送付ス
ルニ及ハス

理由 治罪法草案ニ於テハ其方
八十三條亦二項ニ被告人重罪ナ
ル時ハ未遂犯又ハ法律上ノ
宥恕ニ因リ輕罪ノ刑ニ該ル可キ

者ト云ハ重罪裁判所ニ於テ之ヲ
裁判スト明文ヲ掲ケタリ然レモ
本条即チ中七十条ニ於テハ此明
文ヲ削除モツリ其之ヲ削除シテ
ル主意ハ法律上ノ輕減ニ依リ輕
罪ノ刑ヲ科スル者ニシテ事實
明ラナキ者モ仍ホ重罪裁判
所ノ裁判ヲ仰カサレ得スト
ル片ハ重罪裁判ノ法式タル鄭
章ニモテ多クノ月日ヲ費サレテ
得ズ就テハ徒ラニ原被雙方
ニ困惑セシムル一害カラス之ヲ
慮リテ以テ草案中八十三條

ノ二項ヲ削除モラル者ナリ因ニ本
指及ハレントス

宮城上等裁判所検事

十四年十月廿九日付
十五年五月九日付

第七十一条 重罪裁判

第十二条 治罪法第七十一条 重罪裁判

所ハ三月毎之ヲ開ク

所ハ三月毎之ヲ開クトアリ右三月毎

若シ事件夥多ナルハ

トアル間廳ノ期日ハ豫メ司法卿ヨリ

ハ控訴裁判所長及ヒ

達セラルルヤ或ハ三月ノ期毎之其都度

検事長ヨリ司法卿ニ

控訴裁判所長若検事長事務ノ都

具申シ其許可ヲ得テ

合フ候議ニ間廳相成ル儀乎

臨時開廳スルヲ得

指令

第十二条 後段同ノ通

第七十二条 重罪裁判
所ニ控訴裁判所又始
審裁判所ニ於テ之ヲ
關ス

判事ヲミテ當然之レニ代ラシムルハ
キ義ニ有之候哉

判所長及ヒ先任ノ
判事ヲ以テ之ヲ充ツ

亦一條 陪席判事ヲシテ代ラシムル

治罪法第六号公布十四年九月二十日

ヲ得ス

治罪法第七十三條

第二條 重罪裁判所ノ裁判長若ク

ハ陪席判事ニ對シ忌避ニ就テノ故

障及ヒ其裁判官ノ回避等ハ總テ

治罪法第二百八十一條ノ規則ニ

從フハキハ云々待タサレモ其申立

候事

ヲ受ケテ之ヲ判決スルハ會議局ハ

亦廿五号公布十四年十月六日

重罪裁判所ヲ早キタル裁判所ノ

會議局ト心得可然哉

末文陪席判事亦

内訓

七十九條亦二項補

亦二條 忌避ニ付テノ故障及ヒ回
充判事ノ義當分其
避ヲ判決ス可キ會議局ハ其重
裁判所長又ハ院長
罪裁判所ニ之ヲ開ケ可キ義ト心
ノ臨時指定スル所ニ
得ハレ

候事

第七十四條 重罪裁判所
 檢察官ノ職務ハ控訴
 裁判所檢察長又ハ其
 指名シタル檢察之ヲ行フ
 始審裁判所ニ於テ開ク
 中ハ檢察長ヨリ始審
 裁判所檢察ヲシテ其
 職務ヲ行ハシムルヲ
 得

第七十五條 重罪裁判
所書記ノ職務ニ關
スル裁判所ノ書記
之ヲ行フ

宮城上等裁判所検事

十四年十月廿九日
十五年五月九日付

第七十六条 控訴裁判所

分十三条 治罪法分七十六条 重罪裁

検事長ハ閉廳ノ後既

判所ヲ始審裁判所ニ於テ周キ始審

決事件表ヲ作り司法

裁判所検事ヲシテ職務ヲ行ハシメ

卿ニ差出ス可シ

テルル該検事ハ閉廳ノ後既決事

事件表ニハ控訴裁判

件表ヲ作り検事長ニ差出ス可キ

所長認印シ且意見

哉

アルルハ之ヲ附記ス可

指令

第十三条 治罪法分七十六条 第一項

ノ通ト心得ハシ

第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ

刑事局ヲ置テ左ノ各

件ヲ裁判ス

一 上告

二 再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定ムル

ノ訴

四 公安又ハ嫌疑ノ為裁

判管轄ヲ移スノ訴

司
法
省

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日請訓
十四年七月廿三日内訓

第七十八條刑事局ニ

四二曰第七十八條判事五名以上云々

於テハ判事五名以上ニ

トノミ有レハ大審院ニ於テハ裁判長

非ケレハ裁判ヲカス可

ノ名称之レ無キモノカ

カラス

右ハ五名以上トノミアレモ其五

名中上席判事ヲ以テ裁判

長ト為ス可シ

分四條判事五名ノ中上席十名者

ヲ裁判長ト省做スヘシ

司
法
省

刑部
刑部
刑部

第七十九条 刑事局判

事ノ職務ハ司法卿

ノ奏請ニ因リ其院判

事ニ之ヲ命ス

判事差支アルハ民

事局判事授任ノ順

序ニ從ヒ其職務ヲ

行フ

刑部
刑部
刑部

第八十條 刑事局檢察
官ノ職務ハ其院檢察
長又ハ其指名シタル檢
事之ヲ行フ

第八十一条 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

宮城上等裁判所検事
治罪法第八十二条豫審表云々記
載アルモ大審院ニ於テ豫審ヲ
為スノ場合マラサルカ如ク御用
示ヲ仰ク

指令

第八十二条豫審及ヒ公判云々ハ
検事長ヨリテ豫審事件ノ上告
表ヲ差出サシムル者トス

理由大審院ハ事実ノ審判ヲ
為ス所ニ非サレハ豫審ヲ為ス
ルハ之レヤシトモ豫審ノ上
告ハ之ヲ受クルヲ以テ本指令及

第十四条 検事長ハ三

月毎ニ豫審及ヒ公判
ノ未決既決ノ事件表
ヲ作り司法卿ニ差出
ス可シ

事件表ニハ院長認印
シ且意見アルハ之ヲ
附記ス可シ

第二條 見解ノ通

但高等法院ノ開ケタル後
其豫審判事ニ送致スヘシ

高知裁判所判事

十四年五月十八日
全 年五月三十一日
回 答

第八條 本法第二百一條ノ規則ニ依リ
犯罪ノ場所ニ臨檢セシ際本法第八十三條ニ掲
ケル所ノモリナル時ハ
高等法院ノ管轄ニ屬スルモ
ナリト雖モ其至急ヲ要スル場合
ニ於テハ假ニ豫審ノ処分ヲ為シ
本法第二百二十條及二百二十三條ノ規則ニ依リ
犯罪ノ地ノ

於テ之ヲ裁判ス

輕罪裁判所ノ檢事ニ之ヲ送致ス
可キ哉若シ至急ヲ要セサル場合
ニ於テハ只其身分ヲ証明シタル
調査ノミヲ作リ管轄違ノ処分ヲ
為ス可ク然ト相心得然ル可キ
哉

又ハ其至急ヲ要スルト否ヲサルト
ニ拘ラス管轄違ノ言渡ヲ為ス
迄ノ手續ハ總テ通常ノ規則ニ
從ヒ豫審ノ処分ヲ為シ然ル可
キヤ

回答

第八條第一項及第二項 治罪法ヲ

二百一条ニ定ナリル規則ニ從ヒ現
 行犯罪ノ場所ニ臨檢ミタル際
 其事件タル所八十三条ニ記載シ
 タル高等法院ノ管轄ニ屬ス可
 キモノタルハ一ヲ認知ミタル時ハ亦
 百十六条ノ規則ニ準依シ被告
 人ノ訊問又ハ檢証命令ヲ為シ
 タル後証憑及ヒ事實參考ト
 為ル可キ事物ヲ高等法院ノ均
 ケタル上其豫審判事ニ送致ス
 可キモノトス

第八十四条 高等法院ハ
 司法卿ノ奏請ニ因リ
 上裁ヲ以テ之ヲ開ク其
 裁判スヘキ事件及ヒ
 開院スヘキ場所モ亦上
 裁ヲ以テ之ヲ定ム

通帯ノ規則ニ從ヒ急速ヲ要スル處
分ヲ為シタル上ニテ相當ノ手續ヲ
為ス可シ其非現行ニ係ル時ハ治
罪法第百七条第四ノ規則ニ從ヒ
高等法院ノ檢察官ニ送致ス
可シ

第八十七条 高等法院
檢察官ノ職務ハ大審
院檢察長又ハ司法卿
ヨリ指定シタル檢察之
ヲ行フ

第八十八條 高等法院
書記ノ職務ハ大審院
書記之ヲ行フ

之テ裁判ヲ為スニ付更ニ上奏シ
テ開院ヲ為スル要セス故ニ一年
内ニオハ八十九條ニ依リ上訴スル者
ハ高等法院ノ名宛ニテ各書類ヲ同
院書記局ニ差出スヘキ者トス若
シ一年ヲ過リルハ更ニ開廳ノ手
續ヲ為サレハ高等法院ノ名ヲ
指ス能ハス又各書類ヲ差出ス廳
トキ、付司法卿ニ差出サスル
ト相定ムルコト至當トナスヘシ

内訓

亦此條開院アリタル上ニ一年內
ハ其事件ニ就キ上訴スルトキハ

原裁判官必分スルニ付亦九十八
條ニ依リ上訴スルトキハ高等法
院ノ名ヲ以テ差出スヘシ若シ一
年ヲ過キ上訴スルルハ更ニ上奏
シテ開院セサルヲ得サレニ付司
法卿ニ各書類ヲ差出スヘキ者トス

第九十條被告事件殺
 多ナル片又ニ再審ノ訴
 ヲ裁判スヘキ片ハ新職
 負ヲ命スルヲアルヘシ

第九十一條 高等法院ノ
訴訟手續ハ通常ノ規
則ニ從フ

